広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第53号　2004　237－243

植民地期朝鮮における日本語教育体験者に対する質問紙調査

李　政樹

(2004年9月30日受理)

Questionaire survey for experiences of Japanese education in Colonial Korea

Jungsu Lee

This is described from the point of view, which is different from those previous studies about Japanese education in Colonial Korea based on policy studies had.To recognize the actual condition of Japanese education in Colonial Korea, I carried out the questionary surveys of three times targeting experiences of Japanese education in Colonial Korea, a total of 95 (45 male and 40 female, unknown 10). I quested for the overall tendency by data digitalization, extracting 38 items from questionaire and categorizing conscious for Japanese education, orientation of Japanese ability, language environment, and education contents. In addition, I exerted effort to recognize the circumstance at that time compared to free description in related matters.

Key words : colonial Korea, Japanese education, learner, questionary survey
キーワード：植民地期朝鮮，日本語教育，学習者，質問紙調査

1．はじめに

これまでの植民地期（1910年～1945年）朝鮮における日本語教育に関する研究は，主に法令及び学制などに基づいた政策研究が中心となってきた[1)]。また，その主となる論旨は，支配者の強圧的な言語政策という側面に焦点を合わせたものが大部分であり，そういう論考の多くが時期による違いなどをあまり重視されてこなかった[2)]。さらに，これは「植民地全時期」における言語（日本語・朝鮮語）政策を一まとめにして扱ってしまう印象が強く，政策主体の視点が重視されて被支配者側の視点が軽視されてきたことが否めない[3)]。

稲葉（1990：82）は，「少なくとも植民地期に入る前までは，反日的な感情が激しく高まるなかでも『日本語』は朝鮮人によって積極的に学習・受容されていた」と述べており，井上（1992：164）も同時期において，「民族私学やキリスト教系私学の代表とされる学校にも日本語を教えたものが少なくなかったこと」，「国権回復を目指す教育救国運動の一環として日本語教育が推進された事実」から，「日本語教育＝日本帝国主義の侵略」という図式が単純には成立しなかったことを指摘している。これは植民地期においても同様の傾向があった可能性をも示唆しているといえよう。

2．本稿の目的

本稿は，政策研究を中心としたこれまでの植民地期朝鮮における日本語教育に関する研究とは視点を異にする。そこで，植民地期朝鮮の日本語教育（学習）の実状を把握するための一方法として，当時の教育を体験した人々を対象とした質問紙調査を行った。質問紙調査は，実態を把握することにより問題提起，もしくは文献研究を補う役割として位置付けることができよう[4)]。

本稿では実施した質問紙調査項目のデータをもとに全体の傾向を探る。と共に，関連内容における自由記述と対照し，当時の状況を把握することを目的とする。

3．先行研究

日本語教育史の概説書である関・平高（1997）には次にような記述がある。

同じ1911年に出された普通学校規則第７条第３号には次のようになっている。

「国語ハ国民精神ノ宿ル所ニシテ且知識技能ヲ得シムルニ欠クベカラザルモノナレバ，何レノ教科目ニ付イテモ国語ノ使用ヲ正確ニシ，其ノ応用ヲ自在ナラシメムコトヲ期スベシ」

このことから，併合のごく初期から日本語の教育だけではなく，日本語による教育も行なわれていたことがわかる（p. 190，下線は筆者による）。

小学校規程第16条には

「７，国語ヲ習得セシメ其ノ使用ヲ正確ニシ，応用ヲ自在ナラシメテ国語教育ノ徹底ヲ期シ，以テ皇国臣民タルノ性格ヲ涵養センコトヲ力ムベシ」

「８，教授用語ハ国語ヲ用ウベシ」

とある。

このように，国語の教育と国語による教育は朝鮮半島支配の間徹底して続けられたが，一方朝鮮語はこの1938年の教育令とともに「随意科」となって必修科目から外され，３年後の1941年の国民学校規程ではついに姿を消している（p. 191，下線は筆者による）。

ところが，これはあくまでも法令に明記された方針であり，当時の実状をそのまま反映しているとはいえないのではないだろうか。

植民地下の日本語教育に関する質問紙及び聞き取り調査として以下のような先行研究がある。

李（1981）及び李（1985）は，植民地期に教育を受けた人を対象に日本語認知度及び対日意識を質問紙調査し，年齢などに関わらず対日感情は日本語認知度に反比例すると報告している[5]。合津（1999）は，日中戦争期に学校教育を受けた台湾人への聞き取り調査を通して，当時の台湾人の日本語学習観は自らの意志によるものであったと結論づけている[6]。

ところで，鄭（1980）は，著者自身（1923年生まれ）の体験談を記しているなかで，父子（著者と父親）は日本語学習の必要性を感じていたのに対して，祖父と母はこれに反対していたと述べている[7]。すなわち，家族の間にも日本語学習に対する認識のずれがみられたということである。したがって，当時の日本語教育を，質問紙調査もしくは聞き取り調査のみの結果から，「社会的に必要であったため積極的に習おうとした」，又は「同化教育であったため日本語教育に反対した」という結論に導いてゆくのは，偏った情報による推論の危険性が高いと考えられる。

4．本研究の視点

本研究では次の３点に注目する。1点目は，支配者の政策中心の視点から脱皮して，被支配者である朝鮮人学習者，さらに実際の教育（学習）内容に焦点を当てることである[8]。２点目は，朝鮮人学習者の日本語学習要求に注目すること，３点目は，法令及び方針と学習の実態とのずれに着目することである。

5．調査の概要

(1) 調査期間

2002年５月，2002年９月，2002年11月～12月

(2) 調査の対象

韓国慶尚南道金海市・馬山市・昌原市，釜山市，大田市，忠清南道公州市，忠清北道忠州市，ソウル市在住の植民地期日本語教育体験者95名。

(3) 調査の方法

①2002年５月：調査者が直接質問紙を被調査者に説明・配布し回答してもらう。

②2002年９月：注意事項を再確認した上，代行調査者が実施。もしくは，高校教師が学生の祖父母に配布。学生が質問紙記入に立ち会った。回答は郵送により回収した。

③2002年11月～12月：直接調査と郵送調査を併用。

(4) 調査実施の注意点

①植民地時代に戻ったつもりで当時の状況及び感想などを「ありのまま」答えるように説明した。

②できるだけすべての質問に答えるようにするが，本人にあてはまらない項目，もしくは覚えていないことに関しては絶対に回答しないようにと強調して説明した。

③質問紙の集計及び次回の聞き取り調査の参考とするため，最後の頁の「回答者の背景調査」は必ず書くように説明した。

(5) 被調査者の属性

①性別：男性45名，女性40名，無回答10名

②出生年：1916年以前１名，1916年～1931年44名，1931年以降36名，無回答14名

③解放（終戦）当時の学歴[9]

小学校在学20名，小学校卒業29名，中学校在学8名，中学校卒業以上16名，無回答22名

④これまで従事してきた主な職業

農業21名，教員11名，商業10名，主婦10名，会社員6名，公務員3名，工業3名，水産業1名，無回答30名

⑤初等学校在学時の居住地

慶尚道・釜山47名，忠清道18名，ソウル・京畿道6名，全羅道3名，江原道3名，北朝鮮3名，日本本土4名，無回答11名

6．質問紙項目分析の観点

質問紙の項目のうち38項目を抽出し，下記の①～④のカテゴリーに分類し，データを数値化して全体の傾向を探った。また，自由記述における関連内容と対照し，当時の状況を把握することに努めた。

(1) 日本語教育（学習）に対する意識（10項目）
(2) 日本語（能力）の位置付け（5項目）
(3) 言語環境（14項目）
(4) 教育（学習）内容（9項目）

7．考　　察

（集計結果及び自由記述内容[10]から読み取れるもの）

本稿では，「(1)日本語教育（学習）に対する意識」と「(3)言語環境」に絞って考察してゆく。

(1) 日本語教育（学習）に対する意識（10項目）

①日本語教育及び使用が強制されたという実感はありましたか。

よくあった（66%），時々あった（15%），どちらともいえない（5%），あまりなかった（8%），全くなかった（2%），無回答（4%）

②日本語教育（学習）が自分の生活に役に立つと思ったことがありましたか。

よくあった（29%），時々あった（37%），どちらともいえない（6%），あまりなかった（16%），全くなかった（11%），無回答（1%）

当時，大部分の朝鮮人学習者の意識は，日本語教育の強制的側面を認識しながらも，それが生活のため役に立つと思っていたと推察される。強制的側面の自由記述としては

・幼かったのでわからないがカードを取られた(強制)
・朝鮮語を使うとカード（10枚）を取られ，1週間に1度検査されて教師に罰せられた

などがある。

③自主的な日本語の学習が必要だと思ったことがありましたか。

よくあった（21%），時々あった（21%），どちらともいえない（8%），あまりなかった（16%），全くなかった（21%），無回答（13%）

自主的な日本語学習の必要性についても相当の割合の学習者があると認識していた（42%）[11]。ところで，「どんな時，必要と思いましたか」という自由記述の内容を検討すると，それには学業，生活の便利のためには有利だから必要と思うポジティブな側面＜・日本人との対話時，・自分の思ったことを相手に充分伝えることができるから，・日常生活のいろんな場面，・汽車に乗る時必要だから，・配給をもらう時ことばが通じるために・日本の先進もしくは開発された文物に接する時，・読書，本を読んで知識を得る，・学校の授業や団体生活の時，・学業に有利だった，・現代の勉強と一緒，人に負けたくないため，・日本語が上手になりたくて＞と日本語が分からないと不利益を蒙るため不利だから必要と思うというネガティブな側面＜・日本人と意思疎通ができない時，・日本語が下手だということで殴られたとき，・学校生活に不利益を蒙る，・朝鮮語を使うと罰せられるから仕方なく全ての場合に必要だった，・学校でも日本語ができないといじめられた，・体罰を受けたくないから＞の両方が混在している。

④初等学校に入ることに対してあなた自身は抵抗感がありましたか。

よくあった（9%），時々あった（8%），どちらともいえない（4%），あまりなかった（17%），全くなかった（58%），無回答（4%）

⑤初等学校に入ることに対して家族の人が反対したことはありますか。

よくあった（9%），時々あった（7%），どちらともいえない（1%），あまりなかった（8%），全くなかった（72%），無回答（3%）

一方，さらなるデータ収集による時期別の傾向を探る必要があるものの，当時，国語（日本語）の普及が主な目的であった初等学校に対する，本人や家族の認識はそれほど悪くなかったことも推察される＜入学に抵抗感がなかった（70%），家族に反対がなかった（80%）＞。本人の抵抗感の理由（自由記述）としては，＜・幼いとき日本語で（入学）試験を受けて日本語で答えられなかったため落ちたことがある。それで夜学で基本を習って入学したことがあった，・学校で日本語で数を数え，名前をいう時も答える時も日本語だけでしなければならなかったから。教科書も全てが

日本語だった，・母語より日本語を習うということ，・日本統治下での日本式の教育はいやだったから，・強制教育＞などがある。

⑥学校の日本語の授業は好きでしたか。
好きだった（25%），まあまあ（40%），嫌いだった（25%）その他（3%），無回答（7%）
⑦日本語による他の教科の授業は好きでしたか。
好きだった（20%），まあまあ（50%）嫌いだった（18%）その他（4%），無回答（8%）

学校での日本語の授業や日本語による他教科の授業に対する認識がそれほど悪くはなかったいう結果となっている。自由記述としては＜.・義務的に受けた，・わからなかったから面倒くさかった，・義務感で習った，必要だから，・好き嫌いところではなかった＞などがある。

⑧学校で習った日本語が実生活で役に立たないと思ったことがありますか。
よくあった（14%），時々あった（12%），どちらともいえない（2%），あまりなかった（31%），全くなかった（29%），無回答（12%）
⑨あなたにとって日本語教育（学習）に対する印象はどのようなものでしたか。
よかった（21%），まあまあ（50%），悪かった（19%），その他（3%），無回答（7%）
⑩日本語の学習は自分にとって易しかったと思いますか，難しかったと思いますか。
易しかった（26%），普通（34%），難しかった，（35%），無回答（5%）

⑧については，「あった」と答えた人がかなりの割合（26%）で存在し，＜・学校とか店などで使うだけで家族や友達同士では朝鮮語を使ったから，・実生活で日本語を使わなかったから，・家庭では使わない，・ほとんど家の中で生活したから＞などを理由として述べている。

⑨の日本語教育（学習）に対する印象についても肯定的な答えが多い結果となっており，「悪かった」の自由記述としては，＜・怖がっていた（日本全体），・話すことが難しかったから，・日本人は朝鮮人を差別した，・強制させられたから，・日本語を習うことさえその当時はいやだった，日本人が嫌いだったから，・学校の先生，・.朝鮮語を使いたかった，・どうしても母語がよくて強制的に教える日本語はいやだった，・強圧的な教育方式，・一方的に強いられていたから，・思想的に良し悪しではなく，カードを取られて罰を受けることなどであまりいい印象は持たなかった，・.我々は韓国人であるため＞などがあり，「よかった」の自由記述としては，＜・日本語で習っても学ぶというそのものが好きで，・他国語を話して読むために，・日本の本を読めたから，・必要によって好きだった，・其の時日常生活用語だし時代の流れに合流しでだんですから，・当時，習って話すことができたからよかった，・当時習う時にはよかった，・日本語だけ知っていたから，・暗誦をさせてほうびをよくもらった，・よく理解でき，ほめられたから，・たくさん誉められた＞などがある[12]。

⑵ 言語環境（14項目）

①普段日本人と日本語で話す機会はありましたか。
よくあった（20%），時々あった（23%），どちらともいえない（7%），あまりなかった（17%），全くなかった（21%），無回答（12%）

「よく・時々あった（43%）」と「あまり・全くなかった（38%）」がそれぞれ高い割合を示しているが，理由としては地域差が考えられる。自由記述としては，話す機会が多かった学習者は，＜会社に勤めていたとき電話で話した，・隣に住んでいる日本人と話していた，・たまに日本人が遊びに来た，・当時は日本人が朝鮮にたくさん住んでいたから，・学校で先生と，・学校で先生と話す時や店などでも日本語で話さなければならなかった，・教える教師が日本人であったから，・先生の家にお使いに行った時，先生や奥さんと話し合った時，・担任の先生が日本人であったが，卒業後，先生を招待する集いがたまにあった，・道端で日本人が何かを聞くとき，・日本の軍人と時々対話した，・日本へ行った時と日本の友達が韓国に来た時，・たまに日本旅行にいった時，・日本人の商店街，日本人の先生が近くに住んでいた，・郵便局，日本人の先生，金融組合，隣人（1部落2人程度），隣の日本人に可愛がられて，・日本人との接触時，・日本人の友達と話す時，・日常生活，・家の近所に日本人が住んでいたので子供たちとのつきあいで，・隣に住んでいたから＞などがあり，話すことがあまり多くなかった学習者は，＜・学校以外はなかった，・学校だけ（小学校），・学校の先生との対話，・本屋，・日本人の店で物を買う時・村の日本人たちと，・隣の村の日本人＞などがあった。日本語を主に話す環境は学校関係が中心となっていることがわかる。

②学校で最初に日本語を習い始めたとき，誰に習いましたか。
朝鮮人教師（42%），日本人教師（39%），両方（17%），無回答（2%）

③「朝鮮人教師」と答えた方は，日本人教師に習い始めたのはいつ頃からですか。

（自由記述回答者30名）。1年生から（1名），2年生から（3名），3年生から（8名），4年生以上から（13名），ずっと朝鮮人教師（5名）

④学校に朝鮮人教師と日本人教師は何人ずついましたか（比率，自由記述回答者73名）。

朝鮮人教師＞日本人教師（35名），朝鮮人教師＝日本人教師（9名），朝鮮人教師＜日本人教師（29名）

無回答を考慮しなければならないが，本調査の回答では朝鮮人教師の割合が日本人教師よりの比較的高い結果となった。上記の項目については，当時の統計資料の綿密な分析が必要であり，さらに時期別による差も考えられる。

⑤学校で最初に日本語を習い始めたとき，何語で教えていましたか（日本語の授業の場合）。

日本語（53%），朝鮮語（4%），両方（38%），無回答（5%）

⑥学校で最初に日本語を習い始めたとき，他の教科は何語で教えていましたか（他の教科の場合）。

日本語（45%），朝鮮語（12%），両方（39%），無回答（4%）

教授言語は当時の日本語教育の実態を探る際の重要な要因となる。先行研究によれば，併合の初期から直接法が浸透していたとされているが[13]，朝鮮語を媒介とした日本語教授の割合もかなり高い結果となっている。

⑤の自由記述（日本語のみで授業が行なわれたのはいつ頃からですか）では，「朝鮮語」と答えた人のうち5名が＜1年生，3年生，4年生から，高等女学校入学後から，中学校から＞と述べており，「両方」と答えた人のうち24名が＜1年生（1名），2年生（6名），3年生（3名），4年生（11名），5年生（1名），6年生（1名），日本語で説明した後朝鮮語で解釈してくれた（1名）＞と述べている。このことから低学年の日本語の授業では朝鮮語を用いる場合が少なくなかったことがうかがえる。朝鮮語を媒介にした授業から完全に日本語のみの授業への転換は4年生を境にした事例が最も多い。

⑥の自由記述「日本語のみで授業が行なわれたのはいつ頃からですか」では，「朝鮮語」と答えた人のうち5名が＜・3年生の時，6年生，高等科時代4年生から，中学校から，なかった＞と述べており，「両方」と答えた人のうち28名が＜1年生（3名），2年生（6名），2年末～3年初（1名），3年生（4名），4年生（11名），5年生（0名），6年生（1名），高学年の時（1名），卒業まで両方（1名），1，2年生の時は日韓混用であったが，学年が上がるにつれ日本語専用に近かった（1名）＞と述べている。低学年の教科指導には朝鮮語を媒介にして行なわれる場合が少なくなかった[14]。前者同様，朝鮮語を媒介にした授業から完全に日本語のみの授業への転換は4年生を境にした事例が最も多い。

⑦学校内で朝鮮人教師とは何語で話していましたか。

日本語（56%），朝鮮語（13%），両方（24%），その他（2%），無回答（5%）

⑧学校外で朝鮮人教師とは何語で話していましたか。

日本語（26%），朝鮮語（40%），両方（27%），その他（4%），無回答（3%）

⑨学校内で朝鮮人の友達とは何語で話していましたか。

日本語（47%），朝鮮語（23%），両方（27%），無回答（3%）

⑩学校外で朝鮮人の友達とは何語で話していましたか。

日本語（13%），朝鮮語（57%），両方（25%），その他（2%），無回答（3%）

⑪家庭では何語で話していましたか。

日本語（2%），朝鮮語（88%），両方（4%），無回答（6%）

⑦～⑪は児童を取り巻く言語環境をたずねる項目である。⑨，⑩の友人との会話において，「学校内」及び「学校外」で「朝鮮語」及び「両方」の占める割合は日本語より高い。しかし，朝鮮人教師との会話である⑦，⑧でも「朝鮮語」及び「両方」の占める割合は低くない。⑪においては，「朝鮮語」及び「両方」の占める割合が圧倒的に高くなっており，家庭における使用言語は，殆どが母語である朝鮮語であったことがわかる。したがって，植民地末期においても厳密な意味での「日本語常用」には至らなかったと推察される。

⑫同じ学級に日本人の生徒はいましたか。

いた（23%），いなかった（75%），無回答（2%）

⑬近くに日本人の友達はいましたか。

いた（22%），いなかった（75%），無回答（3%）

⑭近所に日本人は住んでいましたか。

いた（43%），いなかった（53%），その他（1%），無回答（3%）

上記の項目を検討すると，全体的にみて日本人との接触がそれほど多くなかった可能性も推察される[15]。

8．おわりに

本稿における質問紙調査を通して明らかになったことは，当時の日本語教育の実状，特に入門期の日本語

指導及び低学年の教科指導には朝鮮語を媒介にして行なわれる場合が少なくなかったということである。これは法令だけで状況を判断することの危険性を示唆していると言えよう。

実状の把握のために一番信頼できる方法は，当時の日本語教育を体験した人々を対象とした調査であると信じる。さらに，質問紙調査のような量的調査の分析と共に質的な要素をも引き出すことができる聞き取り調査を分析することでより，さらに詳細な情報が得られると考える。

【注】

1）韓国人研究者としては，金奎昌・李淑子・朱秀雄，日本人研究者としては，稲葉継雄・井上薫・森田芳夫・久保田優子の一連の研究がある。

2）山田（2001：2）はこれまでの植民地朝鮮における言語政策に関する先行研究の問題点として「『日本語強制』，『朝鮮語抹殺』ということばが自明な事実を表現するものとして用いられ，実態を深く追求することなく一定のイメージが作られてきた。しかし実際の言語政策はこのことばで説明できるような単純なものではなかった」と指摘している。

3）韓（1991）及び呉（2000）は，1920年代以降の初等教育に，朝鮮人の積極的な教育要求があったことを実証しており，植民地研究における新しい視点を示唆している。

4）片桐（1998）を参照。

5）日本語がわかるほど対日感情は良く，日本語がわからないほど対日感情は良くないということ。李（1981），李（1985）を参照。

6）合津（1999）を参照。

7）鄭（1980）を参照。

8）教材自体の分析だけではない，教え方・習い方，教育観・学習観など。

9）本稿では主に初等学校教育における日本語教育の実態を探る。

10）自由記述内容は原文のまま。

11）実際，植民地期に使われた日本語学習書の「例言」及び「序」などにはそれを裏付けるような記述も見られ，単なる生活上の実用のレベルを超えた，処世のための積極的な学習，様々な動機に基づいた日本語学習要求があったということを示している。

阪上綱吉（1913）『学生必携国語作文便覧』作文書
例言：「初学者及び朝鮮総督府判任文官になろうとする者の国語普及文習得」

姜義永（1923）『現代雄弁式辞日鮮演説法附討論・万国会議通用規則』演説文例
序：「吾人の武器は口と筆にある。社会の指導と文化の向上は口と筆の力による」
（原文朝鮮語，筆者翻訳）

12）⑩については，学力差など，個人による違いが考えられるので正確な傾向を述べるのは難しい。

13）関・平高（1997）を参照。

14）聞き取り調査でその理由を聞くと「理解を助けるためであっただろう」と答えた人がいた。

15）聞き取り調査で「当時の日本人はあまり積極的に朝鮮人と交流をしようとしなかった」と答えた人がいた。

【参考文献】

李廷秀（1981）「日本の対韓植民地言語政策－初等日本語教育政策と現在慶南一円の日本語意識に関する分析－」『慶南大学校論文集』第八輯，慶南大学校，pp.347-388（韓国語）。

李廷秀（1985）「日帝被教育年齢層の対日意識調査分析（Ⅱ）－植民地言語政策と関連して－」『慶南大学校論文集』第12輯，慶南大学校，pp.235-261（韓国語）。

稲葉継雄（1990）「旧韓末の私立学校おける日本語教育」『文芸言語研究』言語篇18，筑波大学文芸・言語学系，pp.79-112。

井上薫（1992）「日本帝国主義の朝鮮における植民地教育体制形成と日本語普及政策－韓国統監府時代の日本語教育を通した官吏登用と日本人配置」『北海道大学教育学部紀要』第58号，北海道大学，pp.163-195。

呉成哲（2000）『植民地初等教育の形成』教育科学社（韓国語）。

片桐芳雄（1998）「記憶された植民地教育－韓国・大邱での聞き取り調査をもとに－」『植民地教育史年報』第1号，皓星社，pp.70-90。

合津美穂（1999）「日本統治時代における『台湾人』の日本語学習観とその背景－『台湾人』に対する聞き取り調査を通して－」『平成11年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会，pp.129-134。

関正昭・平高史也（1997）『日本語教育史』アルク。

高橋武則・楊国林共著（1990）『質問紙調査の計画と解析』文化出版局。

鄭承博（1980）「奪われたことば－ある朝鮮人の昭和史－」『人間雑誌』第2号，pp.120-129。

韓祐熙（1991）「普通学校に対する対抗と教育熱」『教育理論』第6巻第1号，ソウル大学。
平高史也（1999）「日本語教育史研究の可能性」『日本語教育』100号，日本語教育学会，pp.45-56。
森田芳夫（1987）『韓国における国語・国史教育－朝鮮王朝期・日本統治期・解放後』原書房。
J.V.ネウストプニー・宮崎里司（2002）『言語研究の方法』くろしお出版。
高橋武則・楊国林共著（1990）『質問紙調査の計画と解析』文化出版局。
山田寛人（2001）『植民地朝鮮における朝鮮語教育政策の研究』広島大学大学院博士論文。